

低コスト対候性ハウスによる高設養液栽培で通年安定的に農作物を生産する  
 (有)グリーンみなみ野。サンチュ」といっ作物目としては特殊な商品を主力に市場を  
 開拓する一方、イチゴなど付加価値の高い作物の実証栽培にも挑戦しています。

きめ細かな栽培管理で、**夢のある農業**を目指す(羽後町)

サラリーマンから

営農へと一念発起

秋田県の内陸南部に位置し、  
 県内有数の豪雪地帯でもある  
 羽後町。昭和30年に旧西馬音  
 内町を中心に1町6村が合併  
 し誕生した同町は、平成の大  
 合併では自立を選択し、現在  
 に至っています。各地域には  
 伝統芸能や貴重な文化財が数  
 多く現存する、県内でも稀有  
 な町です。

この羽後町で、平成14年か  
 ら農業を始めようと会社を立  
 ち上げた方がいます。大野新  
 悦さん(49)。精密機械の生  
 産管理を担当していた前職か  
 ら一転、20数年間のサラリー  
 マン生活に別れを告げ、農業  
 の世界に挑戦することを決意  
 します。

「この業界は経験の蓄積で成  
 り立ってるんですけど、自分

には経験がない。だから、栽  
 培を管理できる養液栽培を選  
 んだ訳です」

新規営農ということ、町  
 や県の担当者とも相談したほ  
 か、東北農政局にも足を運ん  
 で助言を得るなど、県の目  
 指せ、元氣な担い手「農業プ  
 ラン応援事業」に応募、農業  
 の実績はなかったものの、生  
 産から価格設定までの計画を  
 詳細に裏付けた結果、晴れて  
 事業認定となりました。

養液栽培は、土の代わりに  
 固形の培地や水の中に根を張  
 らせ、必要な栄養成分を含ん  
 だ培養液を与えて栽培する方  
 法で、土壌からの病害感染の  
 心配が少なく、作物の栄養状  
 態の管理もし易い方法です。  
 大野さんが培地に使用してい

サンチュのハウス内の作業風景。奥行きが90mもある施設の内部には、  
 2棟で3万株のサンチュが栽培されています。





訪問したあきたベジフル大使の王理恵さんにサンチュの栽培について説明する代表の大野さん。

るのはロックウール玄武岩高炉スラグ等を高温で溶解し繊維状にした人造鉱物繊維)で、腰ほどの位置に高設しています。作業性が高いため、雇用にも適しており、比較的

### 「サンチュ」という

#### 副次的ともいつべき野菜

平成13年に福島県で見たサンチュのハウス栽培に興味を持ち、実際の生産に導入することになりました。

サンチュはチシャとして古来から日本で食されてきた野菜ですが、昭和30年代を最後に栽培されなくなり

生産規模を拡大し易い環境を作り出せます。給液は季節ごとに量や回数、EC濃度、pH値などを調整し、給液装置にプログラムして行います。

副次的な野菜とも言えますが、「あつてもなくてもいい作物だから面白いんですよ」と大野さんは言います。

他県にはだいたいサンチュを生産する農業法人があるのに、秋田では小規模農家だけだったということも選定理由のひとつのようです。

平成15年に約2千㎡の低コスト対候性ハウス1棟を建設、さらに18年にはほぼ同規模の2棟目を建設し、栽培数は3万株まで拡大しました。これを8人のパート従業員を雇用して出荷します。

熱にもとろけにくく焼肉などを包んでもパリッとした歯ごたえが味わえます。そういった性格から、キャベツやレタスのように常食される野菜ではなく、いわば焼肉に付随する

サンチュは成長の早い作物で、成長した下の葉から採っていきます。スーパー向けの個別包装の場合は、収穫した葉10枚を1袋にして、鮮度保持パックで出荷します。そのまま冷蔵庫に保存しても10日程度なら鮮度を保つそ

うです。

1日の出荷量は1、600袋、規模拡大とともに、栽培技術の向上などにより、開業当初の約4倍になりました。

冬場に比べ半分の1株40日での回転の早い夏場の収穫や、売上のほぼ1月分を要する冬場の温風・温湯にかかる重油代など、克服してきた課題は多くすでに営農実績は十分と言えます。

### 養液栽培管理による

#### 多品種安定供給の可能性

大野さんはサンチュの他に、みず菜やトマトも栽培していますが、平成17年からは約500㎡のパイプハウスでイチゴにも取り組んでいます。方式はやはりロックウールを培地に用いた高設養液栽培。18年には約4千株を栽培し、栽培に適さないと思われている豪雪地でも、先進地に負けないくらいの収量を得られることを実証しました。

サンチュがこれからも今の



高設栽培されたイチゴを摘む地元の保育園児。

まま売れ続けるか保証はないと言いながらも、去年拡張したばかりだけど、本当は続けてもっといろいろやりたいんです。意欲は十分なんですけど、「と笑つ大野さん。安全な食料を消費者に安定的に供給すると同時に、従事者にも安定収益をもたらす取り組みは、モデルとして地域農業の活性化にも寄与しています。

(写真提供/羽後町グリーンみなみ野)